

川柳句集

女ごころ



女
ご
こ
ろ

序文

十月の川柳塔まつりが始まる前、A4の入る茶封筒を携えたいわゑさんが、このたび川柳句集を上梓することになりましたので、その序文をとのご依頼を受け快くお引き受けしました。九月中旬からぐずついていた体調が二ヶ月ほどかかってやっと元通りに活動できる元氣を取り戻しはしたものの、その間にあちこちから依頼されていた数件を熟す必要があり、申し訳なくもひと月ほどお待たせした事を心よりお詫び致します。

約三十年に亘る作家活動の中から多分自選されたと思われる五百数十句は、どの句もいわゑさんそのものであり、真っ直ぐなお人柄がそのまま珠玉の作品として次から次と私の前に現れ、川柳の神様が私にご褒美を下さっているような気分です。一回目は何のチェックもしないまま読み終え、そのまま幸せな眠りに誘われてしまいました。

何日かしてじっくり味わうことが出来ましたが、初め素通りしていた作品に「オ

「これやこれや」と、まるで宝物を掘り当てたみたいに一句ずつ書き出し「これは琥珀、これはルビー、これはパール」などと好きな様に分類しながらゆっくりいわれ作品を楽しむことが出来ました。中でも女性作品としてはユニークな「琥珀」。つまりお酒にまつわる作品に絶品といおうか、私が酒好きだから惹かれるのか、いわゆる作品の酒の句にはブラックホールみたいな引力を感じます。デートして飲みに行つた事はないですが、古くは一月十五日のおめでとう会をはじめ、川柳塔まつりなどの宴には必ず参加されて居ります。彼女は飲んでくだ巻くのではなく、「いい気分」で飲ませてもらつてます」を態度で示してくれるという彼女にしか出来ないパフォーマンスの「ワザ」を持つて居て、彼女のまわり一帯を一気に盛り上げるといふ高度なエンターテナーぶりをご披露されるのです。こういう訳で作品紹介はのっけからお酒に纏わる句を並べましょう。

魂は彼方に飛ばし飲んでいる

上品に飲んでおります初対面

熱爛とひととき天下人となる

飲みつぶり見込まれ鬼の仲間入り

深いこと聞かず一献かたむける

面つけぬ同士の酒でよく弾む

ほろ酔いの月と道行きするもよし

熱爛とふわり次元の外にいる

路郎の「旅人」や豆秋の「ふるさと」は何度読んでもその都度新しい物を発見出来る「深さ」を感じます。言葉が平易でシンプルなのは推敲の果ての単純化である故、学ぶところ大であります。この作品集もそんな大先輩の血を引き継いでくれていて嬉しい限り、だから一度や二度では読み足りなくなる筈であります。特に初心の方々には何回も読み返して自分の作品をつくる上の栄養にして頂きたいと思えます。私の本棚の路郎と豆秋の句集は書き込みとチェックで手垢のついたどころではありません。

酒の句を「琥珀」に喩えたので次ぎに挙げる作品群は「ダイヤ」としましょう。

少々の悪の匂いが頼もしい

掌で天狗をすこし遊ばせる

弁解はやめとこ月に笑われる

雑踏の中で別れが言いやすし

漬けられて茄子は本領發揮する

握ってる石がダイヤと気付かない

リーダーはひっそり汗を拭いている

花々はひたすらに咲き散ってゆく

句は人なりと言われています。いわゑさんの句は実に魅力的です。と言うことは、
いわゑさんも魅力あふれる女性なのです。

次に季節のうつろいを詠んだ彼女の心の風景を紹介しましょう。

御堂筋黄色いコント降ってくる

鏡かけすこし派手目に冬支度

雪が降るドラマの中に居るような

神様の笑顔のような寒牡丹

二日月寄らば切るぞと言う如し

約束を果たしたように薔薇が散る

流れ星恋の炸裂かも知れぬ

ほっかりの雲よ戦は嫌です

家族とのつながりをどう捉えているでしょうか。運命的なひとつのしがらみは得てして重くなり勝ちですが、彼女は軽いスケッチの様に描いています。とても風通しのよい暮らしが見えるようです。

訥弁の父の傍には母がいた

敬っています我慢しています

同伴で出かけて喧嘩など致し

沈黙のときも刻んで夫婦です

諍いをしたのに御飯よう食べはる

底の底では夫に丸をつけている

カーネーションしかと私に子が二人

説教をされてる方が大ジョッキ

内心は喜んでゐる息子の意見

蓄たちの希望通りに咲かせたい

自分ほどわかりにくい存在はありません。自信に満ちあふれた日もあればすこしの躓きでおろおろする日。真面目な顔して嘘吐いてゐる自分に呆れたり、言わなくてもいい事をすべらしたり全くどうにもならないのが自分。しかし傍目にはよく見えてゐるのも自分。これは私自身の分析だがいわゑさんはどう見てゐるだろうか。

手帳から素顔のわたし現れる

あんなものなんて好きかと酒のこと

笑うにも泣くにも仮面邪魔になる

鏡よ鏡たまに騙してくれないか

忘恩や紙人形の目に出会う

ノラにもなれず静かに塩の蓋まもる

思考力ゼロの時間もあつてよし

新しい壁と格闘しています

おしゃれして時に自分を抜け出そう

平成二十一年も暮れようとしています、いわゑさんの素敵な作品に力を貰いました。この作品集出版を機に一層精進されてたのしい作家生活を送られん事を切に望む次第です。

草木庵にて

平成二十一年十二月十五日

川柳塔社主幹 河内天笑

もくじ

序文

河内天笑

3

大空に

11

パッチワーク

43

神様のタクト

71

瞑想の扉

117

振り向けば

149

千年の恋

171

跋

奥田みつ子

194

あとがき

196

大
空
に

(昭和五十五年〜六十二年)

大空にチヨーク一本あればいい

嫁ぐ娘の晴れ着にこめる母心

母よりも幸多かれと祈る日々

一目ずつ指で編みこむ娘への愛

梅雨しとど静かに友と小半日

意地という衣を脱いで肩かるく

もくせい
の香りが母を偲ばせる

帰省の子一兩日は他人めき

夫にも内緒にしてる宝物

和菓子から祖母の童話が歩きだす

萩すすき友禅模様のように揺れ

ばらが散る恋の衣を脱ぐように

父よりも伸びた息子とビヤホール

化粧ポーチすこし不倫に憧れる

幸せな受胎の報に花を買う

振り返る二十五年は泣き笑い

身動きの出来ない恋や冬木立

青空に母のいそいな雲がある

キラキラと光る海には嘘がない

赤ちゃんへみんな平和な顔になる

厄介をかけずに逝った母の足袋

許されて許して夫婦の長い旅

鏡かけすこし派手目に冬支度

一枚の紙に人間裁かれる

視界ゼロ愛の炎に包まれる

一群のペンペン草にも天がある

切り札を捨てた瞬間霧晴れる

頑固さを引けばやさしい父だつた

山脈の果てにわたしの湖がある

鮫小紋一期一会の茶を立てる

袋帯じんわり姑を意識する

うやむやな返事かすかな望み抱き

杭一本流れを止めることもある

貫禄のあるおじさまと御堂筋

かりそめの恋人になる傘の中

よちよちの孫が落ち葉を追いかける

片言の孫が主役の座を占める

御仏の道で豊かになる心

掌で天狗をすこし遊ばせる

美しい誤解のまままで居たかつた

公園で地球の音を聞いている

ご祭礼仁王も今日は晴れやかな

万歩計ゆっくり秋の絵の中に

木枯らしの中で人生など思う

夫婦ですうまい言葉は要りません

人の世や紙に表裏のある如く

こだわっていたのは自分だけだった

もう会えぬ人を頭に刻み込む

嘘という空間のありなごませる

空の青突然叫んで見たくなる

春の絵に包まれ鬱を抱いている

散歩する芽吹く匂いに酔いながら

満月にすべて告白させられる

藪椿ほろほろ恋の雫する

薄幸の美女にも似たり沙羅の花

流れ星忘れることは難しい

有為転変ビルを眺めている瓦

裸婦の絵に自分の顔を置いてみる

弁解はやめとこ月に笑われる

甲子園沸くと夫が落ちつかぬ

ノラにもなれず静かに塩の蓋まもる

沈黙をしてるジョーカー握ってる

仁王さんも美女にウインクしてみたし

薬よりよく効いてきた熱い酒

花生けて苦手な人を待っている

それぞれに煩惱を抱く五色豆

夕焼けのなかで悔しさとけてゆく

何色に塗っても自分変えられぬ

敬っています我儘しています

アメフトの怒濤にも似た若さなり

言い勝って胸に小さな乱残す

川がキラキラ今日わたくしの誕生日

照る日曇る日狂うてみるもまたよろし

いい妻を真似て絶叫したくなる

きびだんごもらってからの泣き笑い

褒め言葉たくさんもらい孤独なり

クレヨンでうちのピカソの抽象画

大空に魂干している詩人

姿見へ女の紐が落ちてゆく

縫い上げた浴衣へふっと亡姑想う

善と悪その中ほどで生きている

裏話聞いても好きに変わりなし

ばら枯れる別れを暗示するように

三面鏡へ時に女は無理をいう

初恋へたんたん書く年賀状

母さんに似てきたなどと不満そう

ときめきをそつと包んでいる小紋

青畳椿一輪極まれり

ほろ酔いの月と道行きするもよし

失恋を青春讃歌とも思う

忘恩や紙人形の目に出会う

道楽も頑固も許す三回忌

パ
ツ
チ
ワ
ー
ク

(平成元年より六年)

平成元年度 茴香の花賞（五句）

パッチワーク恋のかけらを継ぐように

晴れ着きる女に年はないのなり

蓋をしておけば誰かが開けにくる

マネキンの冷たく笑う飾り窓

姫だるまやさしい顔で起き上がる

姉が逝く白木蓮は遠く咲く

金魚ひらひら七日も続く風邪の熱

風邪の子の見舞いのようにバラが咲く

美しい涙男を油断さす

花しようぶ風渡り来る母がくる

千手観音望み一つがままならぬ

留袖を脱いでどよめき聞いている

白菊が凜々しい武者に仕立て上げ

心では白旗上げている夫

しとやかな一日だった一つ紋

いいところを見つけて夫婦しています

夫へはわがまま詫びるチョコレート

もの思う本はページをめくるだけ

沈丁花出会いが少し遅すぎた

子を叱る大きなまるにしたいたいから

生きている十指に余る欲がある

落ちてなおドラマの続く椿の朱

片思いそんなページもあってよし

沈黙考目の端にあるりんごの絵

ああ誤解解けてビールをあふれさす

こころを磨く本を立ち読みしています

少年は母を美人に描きたがる

菊かおる法事の酒も酒は酒

酒とろり時は止まっているのなり

仮の世はグラスの底の喜劇かも

しあわせな顔で夫をけなしはる

れんげたんぽぽ小さな恋のものがたり

舌の上転がしてみる酒の露

ハートのクイーンだけが私にしたがわぬ

しあわせを下さいスペードのエース

女の髪にいくつドラマがうずもれる

花びらを集めてみても過去は過去

時に魔女時に淑女でわたる川

姑らしくゆったり加減に結ぶ帯

漬けられて茄子は本領發揮する

いちまいの舌できりきり舞をする

ひやひやとさせつつ子らはひとりだち

乾杯乾杯星の王子と飲んでいる

鏡割れ千の私が現れる

落ち椿女の園を見る如し

万葉の彩を思わす露草よ

心乱れて鬼面びったり合う日なり

テレビから皇室絵巻見えています

どちら様もお留守花の日曜日

疑問符のように顔出す豆の芽よ

あんなものなんで好きかと酒のこと

二日月寄らば切るぞと言う如し

褒めることも心得ている姑だった

群咲いて薔薇もいくさをしています

折に触れキラリと光る姑だった

喧嘩する夫婦しあわせなんだとさ

諍いをしたのに御飯よう食べはる

再会の酒は甘うてほろ苦し

雲百態人に百態あるように

夕ざくら静の世界へ迷い込む

鏡の中で女が笑うそして泣く

うとうとと初恋に逢う午後の椅子

甘い声で神におすがりしてみよう

科学ではどうにもならぬハートです

両方を立てて自分の顔がない

紫外線気にしながらの立ち話

軒先の藤が古典へさそい込む

無口でも父が座ると座がしまる

別々の趣味で夫婦のスケジュール

空想から醒めて眼鏡をかけかえる

女坂段だら縞を描きつつ

一掃きの雲よ天女の筆の跡

構えてるだあれも居なくなっている

なんとなく笑い話の哀しけれ

恋人が女の理想ぬりかえる

星ひかる遥かな父のサインかも

その裏を知っているので笑えない

空青し裁くものなど何もなし

絵のような子猫二匹がうずくまる

秋一日伎芸天女の美にひたる

神様のタクト

(平成七年～十二年)

阪神淡路大震災 十一句

瓦礫の中でなにかを探す人のあり

神様のタクトも時に意地悪い

空の青命の軽さなど思う

仮の世の窓から見てる瓦礫の山

解体へすこし哀しいクレーン車

クレーンの威力ぼんやり見えています

花々へ見送られての仮住まい

花が咲いた花が散つたと聞くばかり

急がずに川よゆつくり流れよう

助かつた命だんだん欲がつき

強かに生きよう星が光ってる

壺に花満たして自分慰める

立ち読みの昨日の本が見つからぬ

森の木と話もできた気も晴れた

夫婦にも越えてはならぬ線がある

濃紫歴史の中の佳人たち

一冊の本とトンネルから抜ける

落日へ只ぼんやりと吸い込まれ

酒の瓶よきに計らえなど申す

内心は喜んでゐる息子の意見

人を恋う花火は天を焦がすなり

一巻の絵巻を終えた桜なり

さくらさくら生きる辛さと楽しさと

丁重に個性的など申し上げ

ぼたん園静かな乱を見る如し

童話読むひととき神の子になって

上品に飲んでおります初対面

幾歲月窓はわたしのロマンです

沈黙のときも刻んで夫婦です

満月の凄さ悪女に似たるなり

震災記念日生きて乾杯しています

沈丁花兄は静かに幕を閉ず

地震情報遠くて近い日が浮かぶ

虚と実の狭間でペンと遊んでる

沈黙をしてるジョーカー握ってる

バッジ一つと男の首がつながれる

面つけぬ同士の酒でよく弾む

一面の菜の花畑母といる

ゴーギャンもゴッホもしのご孫の絵だ

合格の二字を何度も読み返す

秘密一つ守り続けていて悪女

古書店で青春に会う雨の午後

得意満面小さな嘘も混ぜながら

悪いところばかり似ている似顔絵だ

彦星と年を重ねていく安堵

積乱雲天女の墨絵かも知れぬ

同伴で出かけて喧嘩など致し

悪友の言葉は後で効いてくる

憧れの人が近くにいて無口

パーティーの軽いジョークと食べている

木犀は夜のしじまにしかと咲き

隣席が美人夫が落ちつかぬ

木は天に届こうとして葉をゆする

人を許して仏に明かり点けている

嫌な人に会うにも女紅を引く

もう一人の私に贈るねりわさび

雑踏の中で別れが言いやすし

花の下過去も未来も白になる

花時計恋の迷子を知っている

しあわせを誇示する愚痴を聞いてあげ

コーヒ一杯マドンナたちは華やいで

幼稚園もう先生に憧れる

秘密知るペンはキャップを被せられ

父親になった息子がまぶしい日

脱皮したい思いばかりの風の中

りんどうを好んだ母の忌に活ける

思考力ゼロの時間もあつてよし

コンパクト恋は小さな嘘もいう

オアシスを見つけてからは輪が乱れ

身辺に鬼も天使もはべらせる

鬼千匹軽くおさえた腕も萎え

オーイ雲テープを投げてくださいか

乱れてもコスモス気品くずさない

数え歌亡母がにっこり顔をだす

百薬の長とのんきに生きている

裸婦像の豊かさ負けたなと思う

四面楚歌ぼんやり指紋など眺め

壁開く鍵は自分の手の中に

ジョーカーを妻が時々ちらつかす

木々みどり芭蕉の一句口ずさむ

持つ人が持てば扇子も華になる

突然の訃報みどりの風の中

手帳から素顔のわたし現れる

天才でなくてよかった優しい子

八月の心へ正すものあり

流れ星恋の炸裂かもしれぬ

美しく磨いた鏡おそろしい

日の丸を切に信じていた命

カクテルが軽い別れにしてくれる

飲みっぷり見込まれ鬼の仲間入り

イヤリングきらり淑女に成りすます

目の合つた人形声をだしそくな

神さんも微笑んではる七五三

約束を果たしたように薔薇がちる

善人と組んで退屈しています

ゆっくりと枯れよう急ぐことはない

しあわせの真ん中にいて充たされぬ

逃げ足の早いかわいい鬼である

背いても暖かかった母の膝

しっかりと姑に学んだ家の味

それぞれの形で石も主張する

夫の料理まずいなどとは申しません

孫のためプレスト2の列にいる

新しい壁と格闘しています

美しいもの下げて行きたい新世紀

寂しくて香水の蓋あけてみる

握ってる石がダイヤと気づかない

母が住む星に梯子が届かない

風の中男の顔がひきしまる

泥舟としつても男帆を上げる

もう一人の私ユダかも知れないぞ

よく響く笛をたしかに持っていた

いじわるな美人主役でおもしろい

冗談が本気になって走り出す

ああ夕日未来の中にいるような

一本の糸にやんわり縛られる

返事待つ長い一日暮れてゆく

地獄だと言いつつ何か楽しそう

輝いているひまわりの哀をしる

残り時間少ない母へ鶴を折る

お月さま今日は楽しいお酒です

原稿紙の前でロダンの像になる

夫婦とや違う高さの天を持つ

草に寝て宇宙のパワーひとりじめ

モナリザの真似も結構くたびれる

黙つとこ素敵なひとと飲んだこと

熱爛とひととき天下人になる

メイクする不思議なパワー湧いてくる

窓際が好き花と話ができるから

じゃんけんの好きな家族でよく笑う

燃えていた頃より今がいい夫婦

学ぶことまだまだあつて辞書を引く

つまらない見栄がチャンスをとりに逃す

リボン解くパツとあなたの顔がある

続柄へまどわず妻と書くペンよ

瞑
想
の
扉

(平成十三年～十六年)

おしやれして時に自分を抜け出そう

瞑想の扉を開く午後の椅子

花の芽を見つげうきうき夫呼ぶ

これ以上望むと神に叱られる

夫婦坂晴れ時々は暴風雨

大夕日なぜか泣きたくなってくる

女を主張口紅を引きなおす

イチローのおかげ野球がおもしろい

笑うにも泣くにも仮面邪魔になる

曼珠沙華いつか私も無になれる

秋の天ぼんやり見てる詩人なり

ユニークな答えをくれた三歳児

神様の笑顔のような寒牡丹

すすきの穂突然消えてみたくなる

ひたすらに歩いた道だ悔いはなし

えんぴつと深い迷いの中にいる

底の底では夫に丸をつけている

明日というミステリアスと生きている

人間と人間だから喧嘩する

カーネーションしかと私に子が二人

人間の弱み甘い言葉が欲しくなる

女です金銀銅の涙もつ

来し方の地図を彩る恋の跡

美しく生きたいものよ花の前

刻まれて只の石ではなくなった

知っていることも尋ねて伸直り

熱爛とふわり次元の外にいる

一枚のビラ女心を突いてくる

鏡の中へ女の節目折りたたむ

流し雛海の女神に抱かれよ

えんぴつはいいな自在にものを言う

ランドセル歯抜けの顔も愛らしい

さらさらと男友達女友達

祈るより術を知らない母である

一本のルージユ間違はなく女

少しならいけます等と大ジヨッキ

隠しても尻尾が見えている喜劇

チョコレートうちの大事な人を買う

記念日の夫婦小さなケーキ切る

見えすいたお世辞も時に心地いい

一言がじんわりビタミン剤になる

一行詩自分にあてた手紙なり

散る美学うっとり銀杏見上げてる

強くなる魔法時々かけている

良妻賢母不合格です平和です

たこやきを食べてる顔のしあわせな

熱爛も冷もまたよしよき仲間

公園の椅子は詩人にしてくれる

火を抱いてひたすら歩く女坂

天に星地に人間の喜劇あり

明るさと隣り合わせにいる涙

疑心暗鬼あらゆるものの目が怖い

二人では諍う一人では淋し

ゆるやかに老いのテンポを受け入れる

捨石が凄いパンチで攻めてくる

説教をされてる方が大ジョッキ

鶴を折る一番好きな紫で

疑問符がころりと解けて眠くなる

信じればみんな守っていてくれる

だまされたままの幸せだつてある

火傷せぬ距離からばらを見つめてる

誰もいない神社だたと願いごと

御堂筋黄色いコント降ってくる

盆栽の手入れ夫に耳がない

言いすぎた後ろめたさへ茶を入れる

本心はにぎりこぶしの中にある

風のテロ物ともせずにはら開く

方針を動から静に変えてみる

白酒は苦手です
ねんうちの雛

ハンサムの呪文にかかる雛である

金魚ひらひら浮世はいくさしています

深いこと聞かず一献かたむける

答えたらわたしの虹が消えそうで

極楽の辻でたたらを踏まぬよう

少年が走るみどりの風になる

美辞麗句ここは素直に聞いておく

風情ある人の真似してけつまずく

淋しくて魔女に電話をしています

思うこと言えなくなった恋かしら

黙秘権ポテトチップスたいらげる

ひれ酒と陽気なピエロとはなりぬ

一言を今告げないと過去になる

残りのページ楽しく埋めることにする

参加した旅の数だけ友が増え

しつとりと絹が女を落ち着かす

浅瀬でもおぼれることがあるのです

わたくしのドラマを抱いているノート

私を変えても影がうなずかぬ

魂が乾かぬように本を読む

ぎりぎりのところに本音おいている

転んだら天がにっこりしてくれた

ガラスの靴探した頃もありました

振り向けば

(平成十七年～十九年)

平成十七年度 路郎賞準優秀作第一席（五句）

裸で生まれそして裸になり切れぬ

一言が乾いた胸にしみ透る

振り向けば間違いだらけでも楽し

共白髪生きた勲章だと思ふ

嬉しさと背中合わせの忙しさ

壺の薔薇へしもべのように水注ぐ

少々の悪のにおいが頼もしい

人柄を買いましたなどそつがない

あこがれの星を掴んでうろたえる

誰にしよう一つ余ったチヨコレート

あのひとは宇宙人かも知れないぞ

風のように花のようにも生きたいな

白旗を振って満足感がある

蕾たちの希望どおりに咲かせたい

イケメンよりあなたの方が暖かい

掌に自分をのせて見ています

光ってる人がみんなを光らせる

哀しみを誰にも告げず花を買う

えんぴつと時に迷子になっている

轟音を立ててくずれた恋もある

千手観音ひとも仮面をいくつ持つ

胸に火がまだ残ってる走らねば

彼岸へはゆっくり花を摘みながら

夫の世界妻の世界で見るテレビ

父の日も薔薇とケーキで来てくれる

やんわりと姉妹東ねた母だった

天の川恋に悩んだ日も遠い

簡単に許すと後々にひびく

あれも毒これも毒では生きられぬ

天という鏡に嘘が通じない

神様か風かわたしの背を押す

夫病み命の重さなど思う

大夕日今日一日をありがとう

呱呱の声この世へテープ凜と切る

扱いでパソコン様にすねられる

コンパクト覗いて今をたしかめる

紅を濃く女弱みをカバーする

まだいける高鳴る胸をもっている

はつきりとノーとも言えず流される

鏡よ鏡たまに騙してくれないか

人を許して風のワルツが心地いい

ユニークな意見も入れて輪が出来る

カクテルのような錯覚だった
恋

輪廻転生やはり女の方がいい

恋はビタミン女をぱっと光らせる

スマートな話術にひよいとのせられる

椿一輪ひそと女の部屋にする

竹の風ふわりとかぐや姫になる

辛抱というくれないの実がたわわ

騙された振りもたのしい四月ばか

化粧とや自分励ます魔法です

五月雨はみどりの筆を持っている

花束を母に一度もあげてない

馬耳東風わが道を行くエスカルゴ

わたくしの中を一瞬よぎる鬼

愛されて女の余裕美しい

淡々とペンはわたしを映し出す

ポケットに古い逸話が入れてある

わたくしの底にひそんでいるマグマ

美しく去るといふのも難しい

口約束風と結んだのとおなじ

千年の恋

(平成二十年～二十一年)

凡人は手の鳴るほうに行きたがる

ダブルグラスの底に沈めている炎

リーダーはひっそり汗を拭いている

泥水も冷水も飲み生きのこる

咲いて散る方法神に与えられ

訥弁の父の傍には母がいた

尽くし尽くされ三角四角まるくなる

天は一つ別れは星の数ほどに

母さんはわたしの中の吉祥天

千年の恋をもくもく読んでいる

丸い地球で人間同士いじめあう

鯛も鰯もそれぞれにいるファン

青空にふわりと神の創造画

雪が降るドラマの中にいるような

現実か未来か鐘が鳴っている

スープ皿今日のお客を読んでいる

真っ白い紙が時には火花生む

羅漢が笑うわたしも笑う平和です

鏡とや女の味方そして敵

ぽっかりの雲よ戦は嫌ですね

人間に追いつめられて山が泣く

美しく女乳房をたまわりぬ

十人十色浮世も捨てたものでない

身のうちに夢幾重にも折りたたむ

雲悠悠わたしも急ぐことはない

百日紅一期一会を赤く咲く

さよならの一言千のドラマ抱く

しあわせらしい淡いルージュが映えている

人生に笑うしかない時もある

女ですたまにはお洒落して集う

なおざりに生きても影はついてくる

最終のドラマ拍手で終わりたい

元氣だと自分自身に言い聞かす

男対女不可思議なるいくさ

空っぽの脳に雨情の詩を充たす

まっさらのノート無限の海である

書を読めとみどりの雨が降っている

6 Bの翼にのって無我になる

声高になって自分の負に気づく

どこまでも続くわたしの中の道

初対面かなりオーラのある人だ

人間の不思議哀しいのに笑う

満点でないから夫婦続いてる

真実を言うてぽつんと浮いている

二駅を歩いて恋はまだ足りぬ

絵になつても薔薇はくつろぐ場所がない

過去は過去やはり日の丸美しい

魂は彼方に飛ばし飲んでゐる

神の手の真ん中
にいる嬉しい日

光らなくても生きて
いるのが宝です

嬉しい時
哀しい時も
花ありき

迷路にもきつと出口はある筈だ

花々はひたすらに咲き散ってゆく

むらさきの袂紗拍手も包み込む

二十四時間あふれる程に生きている

ベランダで星の一つになっている

熟年も集えばみんな華になる

天高しわたしも軽く翔んでみる

昭和を生き後悔はない葦である

生きるのは下手でいいんだ天の声

七色の泡に人間迷い込む

情熱が減らないようにペンを持つ

味のある師の一言が今生きる

未来永劫女ごころは謎である

跋

西口いわゑさんの句集「女ごころ」御上梓心からお慶び申し上げます。出版のお手伝いをさせて頂き、嬉しく光栄に存じます。

いわゑさんとはお友達として親しくお付き合ひして句会にも一緒のことが多いのですが、実はいわゑさんの方が柳歴も人生歴も先輩なのです。私が一九八一年六月に橘高薫風先生のお勧めで西宮北口川柳会に入会しました時には、すでにいわゑさんは会員として活躍しておられました。いつ頃から親しくさせて頂いたのか、はつきり覚えていませんが、八三年に開講された薫風先生の高島屋ローズカレッジ西宮川柳教室も一緒、そして、八四年開講の大阪産経学園川柳教室には薫風先生の応援に二人で一年位通いました。その頃のいわゑさんの句で私の一番印象に残っていた、大空にチョーク一本あればいい」をこの句集の巻頭に掲げてくださったことは、私としても大変嬉しいことです。

嫁ぐ娘の晴れ着にこめる母心

視界ゼロ愛の炎に包まれる

ノラにもなれず静かに塩の蓋まもる

晴れ着きる女に年はないのなり

女坂段だら縞を描きつつ

女です金銀銅の涙もつ

鏡の中へ女の節目折りたたむ

私を変えても影がうなずかぬ

輪廻転生やはり女の方がいい

未来永劫女ごころは謎である

校正をしながら、この句はあの句会、この句はあの時の天の句などと私も懐かしく楽しませて頂きました。「女ごころ」の題に相応しく、いわゑさんらしい佳句が並び、皆さんも領いたり、微笑んだりしながら楽しまれることでしょう。今まで何度か私も句集出版を勧めたのですが、この度、やっと皆さん待望の句集が誕生しました。今後ますますの御健吟をお祈りして拙いペンを擱きます。

本当におめでとうございます。

二〇〇九年十二月

奥田 みつ子

あとがき

昭和五十五年一枚の句報から私の川柳への歩みが始まりました。ご近所に西宮北口川柳会の副会長をしておられました、朝山千世子様が私の今の状況をご存知のうえで、川柳によって、少しでも和むことが出来るかも知れないとアドバイスを頂き、私は心を動かされました。

その当時父（舅）が体調を崩して入退院を繰り返して、私は心身ともに疲れ果てているところでした。どうにかしなければと、思っていた矢先でしたので、早速翌月から川柳になんの知識もないまま只、五七五とのみ認識して思うがままに作って出席したところ五句も入選、気をよくした私はやってみようかな、という意欲がわいてきました。その当時の西宮北口川柳会は、若本多久志氏を会長として橋高薫風先生をはじめ、番傘、ふあうすと、時の川柳社するなど、そうそうたるメンバーでした。今振り返ると知らぬということは強いものだとつくづく思っています。

でもそのお蔭で、久しぶりに辞書を繰る、そして自分の世界が持てたことによって父を看取るのがとても楽になりました。父は昭和五十六年に他界致しましたが、自由になれた等とは思えませんでした。何となく空虚な気分でも過ごしておりました。

昭和五十八年西宮北口に「高島屋ローズ・カレッジ」川柳教室が橋高薫風先生を講師に開校しましたので入門、平成七年、阪神淡路大震災で川柳教室が閉校になるまでの十二年間、薫風先生に川柳のいろはから教わり、哀しみは癒され喜びは倍になる、川柳の

奥深さを学びました。私が今日川柳と共にあるのは、薫風先生のお蔭と今更ながら感謝申し上げております。そして黒川紫香先生には西宮北口川柳会の会長を平成十八年九月、百歳の天寿を全うされるまで、長年にわたり支えていただき、ご指導を頂きました。感謝の念でいっぱいでございます。その後私が会長を務めさせて頂き平成二十一年九月、三十五周年の記念大会を川柳会皆様のご支援を賜り、盛会に終わりましたのを機に、二十九年間の川柳の足跡を辿って見ようと思ひ、かつて田中正坊様、そして奥田みつ子様にもすすめられ、家族の応援も受けながら、この程やっと句集の出版に至りました。皆様に読んで頂ければ大変嬉しいと思ひます。

句集出版に際しましては、川柳塔社主幹の河内天笑様に身に余る序文を賜りました。ご多忙と体調を崩しておられますことを承知の上で御願ひ致しましたのに、快くお引き受け頂き厚く御礼を申し上げます。そして跋文を賜りました上に、私の思ひを丁寧編集の労も執って頂きました奥田みつ子様、美研アート様にも厚く御礼を申し上げます。

私にとりまして、川柳とはもう一つの掛け替えのない命です。これからもえんぴつの持てる限り川柳と共に在りたいと念じております。

平成二十一年十二月

西 口 いわゑ



著者近影

著者略歴

西口 いわゑ

昭和二年四月五日 兵庫県生まれ

柳歴

昭和五十五年 西宮北口川柳会に入会

昭和五十八年 川柳塔社同人

昭和五十八年 高島屋ローズ・カレッジ西宮川柳教室に入門

平成七年一月まで橘高薫風先生に師事

平成元年 茴香の花賞受賞

平成十六年 兵庫県川柳協会 教育委員会賞受賞

平成十六年 兵庫県川柳協会 姫路市議会議長賞受賞

平成十七年 路郎賞準優秀作第一席受賞

現在

川柳塔社 参与

兵庫県川柳協会常任理事

西宮北口川柳会会長

平成21年12月22日発行

川柳句集 **女ごころ**

著 者 西 口 いわゑ

住 所 〒663-8202

西宮市高畑町2-82-308

電 話 0798 (67) 3740

発行所 川 柳 塔 社

定 価 1,000円

印 刷 美研アート

